

Title	2) 「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔教育実践 コラボレーション・センター〕採択：学校現場における 心理臨床的関わりについての実践的研究--新しい学びと 育ちの場・洛風中学校でのとりくみを通じて--
Author(s)	井上, 明美; 桑原, 知子; 畑中, 千紘; 小西, 佳世; 布柴, 靖枝; 西嶋, 雅樹; 本多, 早由里; 森田, 健一; 佐藤, 健; 菱田, 一仁; 永山, 智之; 近藤, 千寿枝; 吉田, 啓子; 今西, 和美
Citation	研究開発コロキウム：平成19年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) (2008): 28-29
Issue Date	2008-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/143084">http://hdl.handle.net/2433/143084</a>
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

## 学校現場における心理臨床的関わりについての実践的研究

—新しい学びと育ちの場・洛風中学校でのとりくみを通じて—

Field Research for Consultative Clinical Practice in School Setting

-the project of Rakufu junior high school; in order to provide new ways of learning  
and growth for the school-phobia students

研究代表者 井上 明美 (D1)                      教員 桑原 知子  
研究分担者 畑中 千紘 (D3) 小西 佳世 (M1) 布柴 靖枝 (D1)  
                 西嶋 雅樹 (D2) 本多早由里 (D1) 森田健一 (D1)  
                 佐藤 健 (M2) 菱田一仁 (M1) 永山智之 (M1)  
                 近藤千寿枝 (M1) 吉田啓子 (研修生) 今西和美 (研修生)

### 〔研究目的〕

洛風中学校は、「学び」と「育ち」の場として不登校の生徒のために創られた新しい形態の学校である。本研究において、主に心理臨床を研究領域とする研究参加者は、洛風中学校および洛風中学校に先駆けて明確な理念と目的の下に設立された子どもの自立を支援する学校を訪問し、現場教師と合同の事例検討会や授業参観、児童生徒やスクールカウンセラーとの交流やディスカッションを行った。実践的な活動を通じて、心理臨床的、および教育的、発達の視点に基づく子どもへの援助について考え、さらに、学校という場で、心理臨床に何が求められ、何が出来るのかを考えていきたい。

### 〔研究経過〕

2007年10月23日 洛風中学校訪問・・・事例検討会

(学校の概要) 国から認可を受けた「京都市不登校生徒学習特区」事業として開設された不登校生徒のための自立と学習支援を目的とした公立の中学校

(参加者) 桑原知子教授、矢野智司教授、皆藤章准教授、学校臨床研究会員11名

2007年12月26日 洛風中学校訪問・・・教員との交流、今後の研究方法検討

(参加者) 井上明美 (D1)

2008年1月18日 黄柳野高等学校訪問・・・授業参観、教員・SC・生徒との交流

(学校の概要) 在籍する生徒の大半は不登校経験者であり、教員は子どもの人権を尊重しながら、自立に向けて支援している高等学校。

(参加者) 井上明美 (D1)、西嶋雅樹 (D2)、本多早由里 (D1)、小西佳世 (M1)、

菱田一仁 (M1)

2008年1月24日 きのくに子どもの村学園訪問・・授業参観、子どもの活動参加

(学校の概要) ニールが設立したサマーヒルのような自由な学校を日本にもという趣旨で設立された。感情、知性、人間関係のいずれにおいても自由で、自己決定できる子どもを育てることを目標とする学校。幼、小、中、専修学校がある。

(参加者) 井上明美 (D1)、森田健一 (D1)、佐藤健 (M2)、菱田一仁 (M1)

永山智之 (M1)

2008年2月1日 八王子市立高尾学園訪問・・授業参観、教員・SCとの交流

(学校の概要) 全国で初めて公立小中学校で、不登校児童・生徒を対象として設立された。

教員以外の多数のスタッフが児童・生徒と関わり、人との関わりに重点を置く。

(参加者) 井上明美 (D1)、近藤千寿枝 (M1)、吉田啓子 (研修生) 今西和美 (研修生)

### 〔研究成果〕

スクールカウンセラーに期待される子どもへの援助は三つあると考える。一つは、既に何らかの問題をもつ子どもらへの問題解決のための援助である。他の二つは、危機的場面での対処能力を育てることによって、問題の発生を予防し、主体的に問題と取り組む力を発達させる予防的援助と開発・発達の援助である。きのくに子ども村学園は、大人や教師の既成の世界観による抑圧からの解放によって「自分のことは自分で決める自由」を保障し、教師である大人は、子どもに自分で問題を対処する力を育てることを目標において援助することが求められる。つまり、教師自が予防的、開発・発達の援助を担っている。一方、不登校の子どものために創られた公立学校である八王子市立高尾山学園では、転入学してきた子ども達が再び不登校にならぬように、日常的関わりの中で、この二つの援助をスクールカウンセラーが行う。同様の公立中学校である洛風中学校では、カウンセラーは日常的に生徒と関わるのではなく、個別の面接による問題解決のための治療的援助を行う。日常的な関わりは教師が主であり、教師は心の面とともに学力をつけることに力を注ぐ。「教」に軸足を置きながら、「育」にも配慮していこうとしている学校であるといえる。私学である黄柳野高等学校カウンセラーは高尾山学園と洛風中学校カウンセラーの両方の役割を担い、三つの援助を実践している。カウンセラーは生徒に対して日常的アドバイスや心理に関する授業を実施すると共に問題解決のための個別心理面接も担当する。「人に傷つけられた人は人でしか癒されない」という信念の下に生徒との深い関わりや人権を尊重する教師集団と連携を図りながら、生徒の自立に向けて支援している。このように、学校の中でカウンセラーに対して期待される援助の違いによって、カウンセラーの活動が変化していると考えられる。

今回の学校訪問による実践的研究によって、心理臨床の学校での役割と必要性が一層明らかになると同時に、今後の学校のあり方について多くの示唆が得られた。

(文責：井上 明美)